

## 第4章 高鳳蓮・最近の剪紙

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

高鳳蓮は剪紙を剪るようになって十数年の後、民間芸術の剪紙分野で不動の地位を獲得しました。このころから、彼女の剪紙作品の形式は大型化し、物語性を帯びて来ました。彼女の剪紙は、初期の「窗花<sup>そうか</sup>注1」を脱して、現代絵画、装飾絵画に匹敵するものになっていきました。

高鳳蓮のこの時期の作品は、更に挑戦的になり、見る人たちの気持ちを引き立てるものが多く、展覧会場では精彩を放って度々入選の榮譽を勝ち取りました。20枚の赤い紙で作り上げた一幅の巨大剪紙《陝北風情》は、ギネス世界記録に申請できるほどのサイズで、高鳳蓮の剪紙芸術の豪快な雰囲気<sup>そうか</sup>を十分に醸し出しています。従来の「窗花」から現代芸術作品に進化し、作品の内容は単純なイメージから、言葉での説明が必要な場面描写だったり叙事詩のような巨大な大作へと変化していきました。更には、二十四孝のような、「物語」的なものを作品の題材にして行きました。(以下、これらの作品は高鳳蓮叙事作品と呼ぶことにします)。

高鳳蓮叙事作品の中で、特筆すべきは、《梁山伯と祝英台》で、これは2枚の赤い全紙を組にしたもので、画面いっぱい<sup>そうか</sup>に花が咲き乱れ、人物は物語の主役二人に限らず何人も登場しています。それは



黄河河畔の人々。三枚組剪紙の1枚



六駿馬

高鳳蓮の説明を聞いて初めて納得できるような黄土高原版の《梁山伯と祝英台》なのです。この他、《陝北の情景》や《黄河河畔の人々》と言った、何枚かの似たような大剪紙作品があります。

高鳳蓮の剪紙創作に対する意欲はますます高まり、彼女の得意な《六駿馬》を神前に奉納することになり、部屋の外で、周囲を掃き清めてから額装をし直し奉納しました。

《六駿馬》の中の6頭の西域の名馬は、それぞれに元気いっぱい、顔つきも精悍で、見る人に漢代



梁山伯と祝英台三枚組剪紙の1枚



陝北の情景(部分)



河の神

の“昭陵六駿”のレリーフ——唐太宗・李世民の昭陵の北祭壇上の最も重要な石刻の一つを思い起こさせる雰囲気があります。この六匹の駿馬の原型もまた、李世民が生前最も愛した六匹の軍馬で、彼が高祖・李淵の天下平定を助け、建国した時に騎乗していた愛馬です。

著名な民間芸術評論家・靳之林氏は、高鳳蓮を評して言っています。

「高鳳蓮の剪紙芸術の特徴は、豪快で飾り気なく、勢いが溢れんばかり、意気盛んで、まるで、原始社会・<sup>ヤンシャオ</sup>仰韶文化<sup>注2)</sup>の岩画が漢唐社会の石像石刻文化へと発展し栄えた民族精神を継承しているようだ。清朝末の繊細な複雑さは微塵も持ち合わせていない。彼女の芸術気質は、黄河流域、黄土高原に暮らす陝北の人々の、素朴で健康的な感情の集約でありその結晶である」。

この時期の高鳳蓮の剪紙作品は、既に完全に<sup>そう</sup>窓<sup>か</sup>のジャンルを抜け出し、神霊・人生・祖先を題材にする作品に変わって行きました。しかし、これらの作品に盛り込まれたテーマが多すぎて、どうしても文字の助けを借りて表現しなければならないこともあり、文字を知らない高鳳蓮にはかなりの苦勞が強いられました。



乾坤湾 (黄河が大きく曲がった、延川県の景勝地名)

下図は、20枚の赤い紙を使用した、《高家圪坨村風景》と言う作品です。画面の上部に2匹の竜を配置して黄河の神を表しています。鶏・家鴨・鷺鳥など沢山の動物が図案の中央に剪り込まれ、牛・馬・羊・豚など多くの家畜が庭に溢れています。

人々が食べ物に困まれ、食の苦勞をしていないことを表すことが、子孫の、祖先に対する供養だと考えられています。真ん中の上方には、窑洞が幾つか描かれ、開いた窓からは、人々が敬う神々の位牌を垣間見ることが出来、延川地区の窑洞らしい雰囲気醸し出しています。左下角には、石の鼓が置かれ、毎日の生活を、太鼓をたたいて応援する意味を込め、右下角には獅子を配して、人々の一生涯の平安無事が守られることを願います。陝北の情緒がふんだんに盛り込まれた剪紙です。

民間の剪紙芸術は、野の花と同じで、季節に合わせて自ずと咲き、枯れていき、興味の赴くままに自分自身が楽しめます。野の花は降雨がタップ



高家圪坨村風景



創作中の高鳳蓮

りあり、日照が十分なら美しく咲き、降水が多過ぎ、灼熱の太陽に曝されれば、しぼんで、朽ち果ててしまいます。人々の中には、草花を温室に移植して育てようとする人がいます。花は美しく咲いて、人々を楽しませますが、野性味が薄れ、而も再び風雨に打たれ、陽の光にさらされることに耐えられなくなるのです。自然に従うのが、万物成長の法則ですが、民間伝統の剪紙も当然、その法則からはずれることはありません。

2001年から2003年までの2年間、筆者は研修の為、延川県文化局に勤めました。当時、出来るだけ一、二か月に一度は、白家原にある高鳳蓮の家を訪れましたが、剪紙に関することはほとんど話題にせず、もっぱら、その年の収穫の事や、日常の家事の事、子供の事、農作業のことなどを話しました。私は、高鳳蓮に剪紙のことで、頭を悩ましたり、神経を使ったりしてほしくなかったのです。

下記はある日の、高鳳蓮と筆者が交わした会話です。

「周さんは、ここ何年かずっとこんな山奥で過ごしているけど、家のことは心配じゃないの？」

「妻は、長年連れ添っているのだから、慣れっこになっていますよ。娘も、小さい時から、父親はいつも出張していると分かっているんですよ」

「子供が女の子一人では寂しいでしょう。奥さんをここへ呼んで、ここでもう一人子供を産みなさいよ。私が面倒を見てあげますから」

「それはいいアイデアですね。でも手続きが面倒ですよ」

「何が面倒な物ですか！周さんは、お金がかかるのを惜んでいるんじゃない？」

私は何も言えず、只苦笑いするだけでした。

又、ある時、高鳳蓮は真剣に、私に訊ねました。

「毎朝、中央テレビの番組に私の作品が出ているけど、私は支払う必要があるかどうか訊いた方がいいと思いますか？」

きっと誰かが彼女に入れ知恵をしたに違いありません。毎朝、中央テレビが決まった番組の画面に、高鳳蓮が作成した剪紙が使われていることに対する素朴な疑問なのです。私は答えました。

「高さんは剪紙の名人で、有名人ですから、払う必要はありません。それに会社がコマーシャルを作るとすれば、数秒で一千万円以上になりますよ」

この回答は、高鳳蓮の質問に対してきちんと答えていないし、常識的なことしか言えないので、彼女が満足していないのは明らかでした。

中国中央テレビ局内の多くのチャンネルで取材して編集したものはどれも局の重要な番組です。幾つもの番組が国際的なコンクールに出品して賞を得ています。たまにしか高鳳蓮の家を訪ねていない私でさえ、何回か取材に鉢合わせしています。私がかつて外国で展覧会を開催して、テレビ局のインタビューを受けたり、番組を収録した時には、必ず、なにがしかの報酬を貰いました。しかし中国のメディアにはそんな習慣はありませんから、度々取材があっても、高鳳蓮には僅かなお金も支払われていないのかも知れません。

#### ■注

1) 窗花(そうか)：窓飾りに貼る切り紙

(Weblio 日中・中日辞典)

2) 仰韶文化(ぎょうしょう-ぶんか)：中国、黄河中流域に栄えた新石器時代の文化。磁山文化に続く農耕文化で、紀元前五千年紀から長期間存続した。彩陶の使用を特徴とする。河南省仰韶村の遺跡の名にちなんで命名。

(goo 辞書より)